

## 感覚過敏傾向がある子どもへの保育室における ユニバーサルデザインを用いた支援

西川 ひろ子・西 まゆみ・山本 文枝

Support for Hypersensitive Children in Universal Design Nursery Rooms

Hiroko NISHIKAWA, Mayumi NISHI and Fumie YAMAMOTO

### 要 旨

感覚過敏傾向がある幼児の社会性の発達を促すため、保育室のユニバーサルデザインを活用した支援の効果を検証した。研究期間は三年間である。長期間の参観調査により対象児の発達の経緯を明らかにしたことに本研究の意義がある。感覚過敏傾向の幼児へ支援は、刺激を遮断する手法が取られがちである。しかし、それによって友達とのかかわりの機会も減ってしまう。社会性は人とかかわりの楽しさや他者からの承認の喜びの経験、自己肯定感の獲得、時に他者とのいざこざとその解決経験、ルールの理解、習慣の習得といったプロセスの中で育まれていくことが多い。子どもの成長の機会を保障しながら、感覚過敏傾向の幼児が保育室の中で居場所や安心感を得るためにはどのような支援が望まれているのであろうか。本研究は事例研究であるが、詳細な子どもの発達のプロセスを分析することにより、感覚過敏傾向の幼児への保育実践に貢献することも研究目的である。

キーワード：感覚過敏傾向、保育室、ユニバーサルデザイン

### 1. 研 究 目 的

本研究の目的は、感覚過敏傾向を持つ幼児の発達を促す保育室のユニバーサルデザインの効果を検証することである。幼児は本来、成人より聴覚、嗅覚、触覚、味覚の感覚は鋭く、これらの刺激に大きく反応する。乳幼児にとって感覚の過敏さは自らの安全を守るためには重要な能力でもあるからだ。しかし、通常より過敏傾向を持つ場合は、恐れや驚きのためにパニックになったり、泣きが止まらなかったり、その環境内にいることを極端に恐れ逃げ出してしまうことも多々見られる。障害児保育施設や一部の学校では、レスキュースペースとしてパーテーションに囲われ、周囲の刺激を遮断した小さなエリアを設置している。周囲を遮断した空間は、保育所や幼稚園でも増加傾向がある。外部の刺激が遮断された空間は幼児に安心感をもたらし落ち着きを取り戻しやすい。しかし、幼児の発達にとってはこの遮断された環境は好ましいのであろうか。保育室内で他児とのかかわりによって幼児の社会性の発達は促される。レスキュースペースに代わる幼児の人と関わる機会を減少させない支援はないのであろうか。更に、保育室は共有のスペース

である。特定の子どものためのエリアは他児にとっては異質であり、他児と感覚過敏傾向を持つ幼児を区分するものにもなるだろう。

そこで、保育室のユニバーサルデザインにより、感覚過敏傾向を持つ幼児にとっても、他児にとっても社会性などの発達が促される支援方法を検証することを本研究の目的とした。

## 2. 研究の背景と課題

### ① 感覚過敏に関する研究

発達障害児に、感覚過敏・鈍麻が見られる場合があることは広く知られていたが、アメリカ精神医学会の診断基準であるDSMにおいて、中核症状として「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ」が挙げられたのは、DSM-5からである（American Psychiatric Association, 2013）。

高橋・神尾（2018）によると、それ以後、「ASDの感覚の特徴の問題が大きな注目を集めるようになった」と言える。高橋・神尾（2018）によると、ASD（Autism Spectrum Disorder, 自閉スペクトラム症）の感覚の特徴の問題は研究上、感覚過敏、感覚鈍麻、感覚探求に分類されることが多い。このうち、感覚探求は「特定の感覚に関する経験を強く望んだり、没頭したりする」ものであり、本研究の対象児の行動特性の一部は、この特徴と合致すると言える。

### ② 感覚過敏の支援に関する研究

高橋・増渕（2008）は、アスペルガー症候群・高機能自閉症の本人にニーズ調査を行い、「感覚過敏・鈍麻」について、実態と支援を検討している。それによると、アスペルガー症候群等の本人75人のうち、「突然の音にとっても弱い」とした者は46.7%、「人に触れられるのが大変苦手である」とした者は33.3%と、多くの者が感覚過敏で苦労していることを明らかとなった。そして、支援に関して「指で鼻や耳などをさわると落ち着くのでそのことを気にしないでほしい」としたものが24.0%と、触覚の過敏に理解を求める声があることも明らかにした。本研究の対象児も、触覚の過敏あるいは探求に理解を求める存在であったと言える。

### ③ 感覚統合療法

感覚過敏、特に触覚過敏に関しては、以前から感覚統合（Sensory Integration）療法の枠組みの中で、「触覚防衛」という概念を用いてアプローチが行われてきた。これは、Ayresが提唱した子ども、特に、障害のある子どもの学習・行動・情緒への治療的介入の枠組みである（Ayers, 2020）。この中では、感覚刺激に対する異常反応を軽減するために刺激を調整して与える指導も行う。

### ④ 感覚過敏の保育室内での療育に関する研究

感覚過敏に関する取り組みとしては、近年では岩永（2013）によるものがある。歯科治療との関連で、「注意をそらして過敏反応を抑える対応が効果的なことがあるため、触覚過敏がある場合にクッキーづくりなどで味や視覚情報に注意を向けてもらうようにすることもある」としている。

インクルーシブ教育の広がりに伴い、発達障害児の感覚過敏に対する取り組みも、通常の保育室で行われることが増えていると考えられる。しかし、これらに関する研究は、実態調査（町

田・橋本・堂山・洲上, 2020, 高橋, 2020) などを中心で、実際の取り組み関する研究は少ない。しかしながら、今後さらに、幼稚園、保育園でインクルーシブ教育を受ける発達障害児が増えてくることが見込まれることから、発達障害児の感覚過敏やその傾向についての取り組みについて検討することは重要であると考えられる。

### 3. 倫理的配慮

本研究調査実施前に、調査協力園へ本研究の目的、調査方法、調査にあたっての個人情報への配慮、研究論文以外に本調査で収集したデータを活用しないことなど説明を行い、承諾を頂いた。特に、参観調査において、個人情報に留意し、日時、場所、個人名、顔の肖像などが不明となる配慮を実施した。

また、対象児保護者に対しても同様の説明を行い、研究協力の承諾を頂いた。調査後及び研究論文作成後に、協力園及び保護者、対象児からの質問や問い合わせに対しても誠実に回答し対応する予定である。

### 4. 研究方法

#### ① 研究方法

本研究は、以下の三つを繰り返し、実施した。

##### 1) 参観調査

幼児の自由な活動が多い午前10ごろから12時頃までを毎月2～3回参観調査を実施した。記録方法は、映像録画、映像撮影、記述式記録方法を用いた。

##### 2) 保育カンファレンス

保育カンファレンスは、数か月に一度の割合で、担任保育者、幼児教育研究者（本研究筆頭執筆者）、心理学研究者（本研究第二、第三執筆者）が担当し、記述式記録用紙及び映像等の分析し、保育室のユニバーサルデザイン案の作成、個人指導計画の立案を行った。

##### 3) 保育室のユニバーサルデザインの実施

参観調査や保育カンファレンスでの分析を踏まえて、幼児教育研究者が主に保育室のユニバーサルデザインを立案し、実際の保育室のユニバーサルデザインに基づく保育環境の変更や修正を担当保育者や幼児教育研究者と心理学研究者が実施した。

#### ② 研究期間

××年4月～〇〇年1月（2年9か月間）

#### ③ 対象児

参観調査を実施した当時、対象児の年齢は3歳であった。体型は他児より、小柄であった。行動面の特徴は、以下の9点が顕著であった。

- ・先生によく甘えている。
- ・大きな音や声が苦手である。水泳教室に運動能力の発達のために通い始めたが男性コーチの大きな声に驚き、怖がってしまうことがあった。避難訓練のサイレンが鳴った際には非常に驚い

て泣いてしまうことがあった。

- ・目が合わない。
- ・女兒の二の腕やほっぺを好み、つい触ってしまう。
- ・体幹が弱い。
- ・一緒に遊んだり、一緒にグループになる際には、女兒を好み、男児に対して苦手意識があるようにみられた。
- ・車が好き。
- ・言葉が聞きづらいことがある。
- ・食が進まない。初めての食材が苦手で、白ご飯などは好む。クリスマスケーキがおやつの際に初めて出た際には、「ケーキ食べない」と繰り返して保育者に訴えていた。
- ・集団が苦手である。

対象児の特に顕著な特徴は、柔らかい感触を好み、味覚と聴覚が敏感であった。対象児の専門機関での診断は、聴覚、味覚、触覚、嗅覚の全てが敏感であるとの結果であった。

#### 4. 研究 結 果

##### ① 保育室のユニバーサルデザインの実施

###### 1) 柔らかい素材があるままごとコーナーの設置

対象児は、女兒との関りによって安心感を持つ傾向が見られたが、二の腕を触られる幼児は拒否する仕草を見せていた。そこで女兒が好んでいるままごとコーナーを視線と動線に考慮して保育室の右奥に設置した。右奥にした理由は保育室の左手廊下から保育室に入室する際に視線が集まりやすい場所であり、より多くの幼児の興味と関心を集約させるためであった。また、ままごとコーナーには、カーペットやクッションや座布団やぬいぐるみなども設置し、対象児が好む柔らかい素材が多くある空間にした。対象児にとって居心地が場となり、女兒の腕に触れなくとも代替えの柔らかい素材があるように工夫を行った。

###### 2) 座席は女兒が多くいるグループへの参加

座席は四つの机を合わせて、一つのグループを複数作っていた。多くのグループは男児と女兒の人数割合はほぼ均衡となるように配慮されていた。しかし、対象児は、女兒の近くの方が落ち着くことが参観調査結果より明らかとなったため、対象児が所属するグループは対象児以外を女兒で構成した。

###### 3) かかわりが増えていった男児と同じ座席グループに変更（調査中期以降）

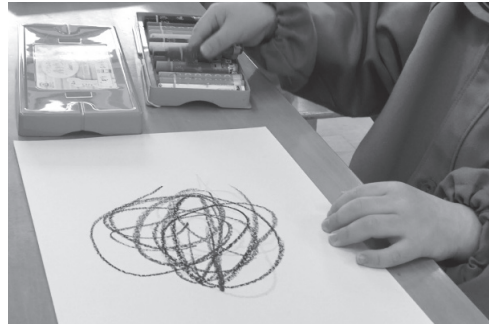
少しずつクラスの他児とのかかわりが増え、自由な遊びの時間では男児の隣に着席することが増加したところ、グループの席の構成を対象児が好んで一緒に行動する男児を含むグループに再構成し、男女比もほぼ同じに変更した。

## ② 参観記録結果

### エピソード1（触覚へのこだわり行動）



画像1



画像2

登園して棚に帽子を置くと、通園リュックを背負ったまま立ち上がり、その足で、座って粘土遊びをしている女兒に近づき、女兒の二の腕、特に、右ひじの内側あたりを何度も触る。肌の柔らかい部分である。女兒は突然のことに戸惑い、嫌がって腕を引っ込める（画像1）。本児はそれでも触り続け、先生に反対の腕を引かれて制止される。本児は一旦、女兒のそばを離れるが、また戻って触り、女兒が本児の手を振りほどいたところで触るのを止める。

この頃、本児の書く絵は、形としてまとまることなく、ぐるぐるとしたなぐり書きの状態であった（画像2）。

### エピソード2（ままごとコーナーが安心スペースに）

ままごと遊びコーナーの設定により、女兒と遊びを通して関わったり、対象児が好む柔らかい感触があるので、対象児はままごと遊びコーナーでの滞在する時間が増加した。その一方、下記のような姿も見られた。

お弁当の時間、お茶の中にご飯が入ってしまい、「流してくる」と言って立ち上がった。お茶を机のギリギリのところに置き、こぼしそうになってしまった。不安になったのか、突然立ち上がって、近くにいた保育者の後ろから抱き着いてきたり、後ろのおままごとコーナーのほうへ行ったりしていた。

一人の補助の保育者が座って食べるよう声掛けしても全く聞いていない様子だったが、担任保育者が「〇〇くん！」と言うと椅子に座ることができていた。

味覚が過敏な対象児にとって昼食の時間は、苦手な食品を食べなければならなかったり、他児より食が進まなかったりと、楽しい時間ではない。保育室のユニバーサルデザインによって設置されたままごとコーナーは、対象児のお気に入りの場所となってしまったために遊びの時間ではない食事の時間にも立ち寄ろうとする行動がみられた。



## エピソード3（女兒とのかかわりの安定と絵を描く能力の発達）

女兒と同じ机のグループとなり、ままごとコーナーでのかかわりも充実していた。ある日の昼食の時間、一人の女兒の鼻にソースが付いてしまった。担任保育者が鼻の上のソースをぬぐってあげると、対象児はそれを真似て女兒の鼻をぬぐってあげた。女兒は嬉しそうに対象児に鼻を近づけて笑いあった。（画像3）



画像3



画像4



画像5

## エピソード4（絵が描けるようになった）

ある日、顔の絵を対象児は描けた。担任保育士に絵を提出することとなっていたが「持って帰りたい」と担任保育者に伝えた。担任保育者に絵を手渡しが出来ない距離を取りながら「持ってかえる」を繰り返して言っていた。参観者が「絵、描けたね。見せて、見せて」とお願いすると、嬉しそうに見せてくれた。その後、大切に自分のバックに入れた（画像4）

更に対象児は席が同じグループの女児の絵をよく見て、真似て描くようになり、いろいろな色を使って描けるようになった。（画像5）

## エピソード5（男児の友達とのかかわりの始まり）

エピソード3から約半年後経過した観察において、行動をともにしている男児の存在がみられた。画像6および画像7は、特定の男児つまり「お気に入りの友達」と行動をともにし、遊びを楽しんでいる様子である。

これまで、女児の横にばかり座席するなど、どちらかといえば男児を避け、女児と行動する場面が多くみられていたことから、これらの行動は最も大きな行動の変化であるといえる。次第に特定の男児から他の男児にも広がりが見られるようになり、女児のそばを離れないなどのこだわり行動も減少していった。

さらには、この2か月後あたりから、クラスでの集団での行動（例、二人組になって移動し、背中をタッチされないよう逃げるゲームなど）にも参加できるようになっていった。



画像6



画像7

## 5. 考察及び今後の課題

本研究は保育室のユニバーサルデザインを用いて感覚過敏傾向をもつ幼児の発達を促す支援の効果を検証することであった。

まず、対象児が好む感覚と苦手とする感覚を分析し、それに伴って頻出する行動を参観調査や

保育カンファレンスによって明らかにした。保育室のユニバーサルデザインは対象児とともに他児にとっても発達が促され、心地よい環境構成するものである。この趣旨のため、対象児の特徴や他児の興味・関心及び現在の発達状況を分析するために長期間の参観調査が必要であった。また、時折、調査のために訪問する研究者では気づかない子どもの姿や保護者の願いや意向を把握するために調査協力園の保育者にも研究協力していただいた。これらにより、効果的な保育カンファレンスや保育室のユニバーサルデザインを提案することができた。

本研究の対象児は聴覚が敏感で特に柔らかい感触を好む特徴を持っていた。女兒の二の腕等を触ることを入園当初は好んで、習慣ようになっていた。そのことにより周囲と友達関係が築きにくい状況となった。この状況を解決するために、女兒が好み、柔らかい感触のクッションやカーペットやぬいぐるみで構成されたままごとコーナーを、保育室で最も視線が集まる位置に設置した。このことにより対象児は他児と関わりながら、安定感を感じることができ、他児との言葉を使つての関わりを楽しむ姿が増えていった。他児にとっても一緒に遊ぶ仲間との認識が定着し、教室では同じグループの席で過ごしていった。更に対象児が描けなかった顔の絵を描けるまで、認知性も発達していった。他児の模倣により線画もカラフルな色を使って描けるまで発達していった。これらの経験を重ねることで、対象児の自己肯定感が高まり、男児との関わりも少しずつ抵抗なく行えることが増えていった。研究期間の三年目では、男児と一緒に活動的に園庭で遊ぶ対象児の姿が良く見られるようになった。

なお、対象児は小学校進学した際にも、最初に女兒の友人を作り、数年後には男児と一緒に遊び、音への対処方法も身に付き、学校生活を楽しんでいると保護者から報告を頂いた。

感覚過敏傾向を持つ幼児にとって全ての刺激を遮断してしまうことは、落ち着く即効性がある。しかし、それによって友人と関わり、発達の機会も減少してしまうこともある。本研究により保育室のユニバーサルデザインは、対象児と他児の双方の発達を促すことに貢献する手法であることが検証できた。

今後の課題は、触覚以外の感覚過敏傾向を持つ幼児を対象とした保育室のユニバーサルデザインを考案することである。

## 謝 辞

本研究にご理解、ご協力いただきましたすべての方に感謝申し上げます。

## 参考文献および引用文献

- American Psychiatric Association, 2013 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition 高橋三郎・大野裕（監訳）2014 DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院。
- Ayers,A.J. Sensory Integration and the Child, 25th Anniversary Edition. 岩永竜一郎（監訳）2020 感覚統合の発達と支援 子どもの隠れたつまずきを理解する 金子書房。
- 岩永竜一郎 2013 自閉症スペクトラム障害児の療育と支援 日本生物学的精神医学会誌 24, pp.252-256.
- 町田 唯香・橋本創一・堂山亜希・洲上真裕美 2020 感覚過敏のある幼児への保育に関する調査 東京学芸大学教育実践研究 16, pp.113-117.
- 高橋秀俊・神尾陽子 2018 自閉スペクトラム症の感覚の特徴 精神神経学雑誌 120, pp.369-383.
- 高橋智 2020 感覚の問題に注目しよう!（第1回）発達障害当事者調査から探る感覚過敏の諸相と支援 作業療法ジャーナル 54, pp.992-999.



高橋智・増渕美穂 2008 アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究—本人へのニーズ調査から— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 59, pp.287-310.

